

## II-12 有痛性の転移性骨腫瘍に対し8 Gy 1回照射を行った一例

○高橋 一樹<sup>1)</sup> 田口 雅海<sup>2)</sup> 工藤 温子<sup>3)</sup>  
(八戸赤十字病院 臨床研修医<sup>1)</sup> 同 放射線科<sup>2)</sup> 同 呼吸器内科<sup>3)</sup>)

〈目的〉転移性骨腫瘍は肺癌、乳癌、前立腺癌患者に多く、癌性疼痛を引き起こす。緩和照射は、骨転移による疼痛の軽減が期待でき、末期癌患者に対して行われてきた。従来は根治的照射に倣い分割照射（主に30Gy/10回）が行われてきたが、近年は5回の寡分割照射や1回照射の有用性が示され、寡分割照射や単回照射を行うことが増えている。今回肺腺癌の股関節転移に対し1回照射で良好な疼痛緩和が得られた一例を経験したので報告する。

〈症例〉60代男性、定年退職後 主訴：右股関節痛

既往歴：20代 十二指腸潰瘍（保存的治療）、30代 鎖骨骨折（金属固定術）

現病歴：右股関節痛を主訴に前医整形外科を受診し、MRIで右股関節腫瘍を認めた。その後骨生検で腺癌が検出され、原発性肺腺癌＋骨転移（Stage4b）と診断。その後化学療法目的に呼吸器内科へ入院し、化学療法を施行、同時にランマークの投与や鎮痛剤による疼痛管理を開始した。退院後も疼痛管理は継続、また病的骨折の予防のため松葉杖による免荷を行うも、右股関節痛は増悪していった。2か月後に緩和照射目的に放射線科紹介となった。

〈治療・経過〉緩和目的に外来通院で骨転移巣へ8 Gy 1回照射を行った。

照射前はオピオイド2種による疼痛管理を行っていたが、照射後1日目で右股関節痛が軽減。照射後2週間でさらに軽減し、オピオイド鎮痛薬1種を中止。照射後1ヶ月の治療評価目的CTで右肺下葉の原発巣、リンパ節転移、右股関節の転移巣の縮小を認めた。その後照射後3ヶ月まで右股関節痛は増悪なく鎮痛薬は維持したまま経過した。

〈考察・まとめ〉今回は骨転移に対し8Gy1回の緩和照射を行った症例を経験した。骨転移における放射線治療は患者のQOL向上のため早期に行うことが推奨される。しかし課題として、照射回数が多くなると患者の協力が必要になる点や病院スタッフの負担、患者の治療費の負担が大きくなることが挙げられる。研究では、1回照射は標準的な分割照射(30Gy/10回, 20Gy/5回)と比較し疼痛緩和や病的骨折の予防の点で優れた結果を示している。照射回数を減らすことで患者やスタッフの負担が軽減される1回照射は骨転移に対する緩和照射として有効な選択肢と考える。